

---

# 其来(それから) ～ 紅葉の神、および豊穰の神の場合

蛆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

其来それから　　紅葉の神、および豊穰の神の場合

### 【Nコード】

N5346L

### 【作者名】

蛆

### 【あらすじ】

豊かさと稔りの象徴、および寂しさと終焉の象徴の、普通の魔法使いに出会った後のお話。

## 豊かさと稔りの象徴の場合 其乃一（前書き）

※東方Projectの二次創作物です。嫌いな方はごめんなさい。  
※Firefox利用者の方は「XHTML ルビサポート」が便利です。

<https://addons.mozilla.jp/firefox/details/1935>

## 豊かさと稔りの象徴の場合 其乃一

私が目を覚ました時、姉の静葉はすでに私の傍らに佇んでいた。姉は秋空を見上げていたので、私も姉にならって空を見上げた。

近頃の空は、高く遠くにあるようだった。どこまで見上げて底の見えない空は、虚ろに見えた。それでも私は、その底の底に焦点を定めるようにして、じっと空を見つめた。ふいに、自分はごく弱い力で天井に貼り付いているだけなのだ、と思った。すると、地をつかむ掌からは確りとした土の感触を受けるのに、まるで今にもこの身が重力の影響を受けて、奈落の底へと逆しまに落ちる予感に襲われた。

私は急激に背筋の縮むような気分に襲われて、右手を発条ばねのように跳ねさせた。掌には冷たい汗と共に、長細の枯葉が幾枚も握り込まれた。枯葉は無惨なほど、くしゃくしゃに潰された。

草のむしられる音に気付いたものか、姉が私のほうへ顔を向けた。それでも何をしようという素振りも見せないのも、私もまた起き上がらずに居た。そうして私は額に少し冷や汗をにじませたまま、背筋の凍ったのが融けるのを待った。戦慄は直ぐに去って、また微睡まじいに似た落ち着きを得た。固く握られた右手も力を無くし、掌から枯葉の残骸が数枚落ちた。姉は少しばかり首を傾げてみせ、再び空の彼方へと目を移した。

私の視界には相変わらず遠い秋空が映っていた。空には、橙色の小さな太陽が所在無げにしていた。視界の上のほうから、妖怪の山の頂だけが私を覗いた。普段は昂然こうぜんとして幻想郷を見下ろす天道や、荘厳な構えをして近寄り難い霊山も、こう申し訳程度ではまるで間抜けのように見えた。

また時折、蚊帳吊草だの狗尾草だのが視界の隅から顔を出したが、これに私はやや気分を悪くした。私には事あるごとに私を覗き込むそれらが、ご機嫌うかがいのようで余所余所しく見えたのである。

見え隠れする高草に合わせて、風の音ばかりが私の耳に届いた。生い茂る高草をかき分ける風の音は、果敢無げに歩む躑あしおとのように聞こえた。遮るものの無い空を往く風の音は、寂しげに吐く溜息のようおこりに聞こえた。風の音は、いちいち私の胸の内を吹き抜けて、瘡かさのように心を震わした。

ややあって風も凪ぐと、今度は耳に届かない音がした。形の無い音は、秋の気配に違いなかった。視界に在る太陽は、ここぞとばかりに大きく膨らみ、私達の居る野原に橙色の光線を吐いた。そして辺りに生える野草が、とろとろとした光線を呑んでいる気がした。私は胡乱な頭で、この橙色の光線が秋の紅葉をもたらすのだと思った。すると何だか、この確りとした地面さえ、呑み残した光線を吸い込んで、みしみしと音を立てながら動き出すように錯覚された。

私は、そうした妄念に囚われるほど疲れていた。それには先程起きた、面倒事からくる肉体的な消耗もある。けれど私は、疲労よりむしろ倦怠と呼ぶべき精神の鈍さを、より強く感じた。

ここ最近ここは、秋が厭なものに見えた。我ながら秋神として有るまじき事まがごとと思うけれど、幾ら考えても、いやむしろ考えれば考える程、秋が禍事まがごとであるようにしか捉えられないのだ。

例えばこの遠い空である。天高く馬肥ゆる秋というけれど、人間が作物の収穫に励み、石高に一喜一憂する頃、何故空はこうも高く、遠くなるのか。

天井の無い空には、神々さえ居ないように見える。私でさえそうなのだから、人間などは殊更そう感じるのに違いない。事実、人間

達は収穫祭が近付く頃を神無月と呼んでいる。元は神嘗月、つまり新嘗の準備の頃を意味するのだが、この空を見上げてしまつては皮肉に感じるのも詮無い事であろう。豊穰を司る私としては、甚だ遺憾ではあるが、私にもそうとしか見えないのだ。

また例えば、のろのろとした橙色の日光や、寂寞とした風の音に垣間見える、秋の気配である。私は豊かさと稔りの象徴であるから、そうした気配に冬の訪れを予感して、まず人間の里の収穫や備蓄の具合を気に掛けた。とはいえ昨今では不作に見舞われる事も無くて久しい。収穫祭も例季執り行なわれている。今の人間の里で、食うに困る事などまず無いだろう。

だからというわけではないが、私は最近里を思うたび、人間は自分達をないがしろにしてはいないか、という懸念をしばしば起こした。昔を偲ぶわけでは無いけれど、それでもかつては私達への信仰も確かなものであったように思う。祈穀祭や御田植祭も執り行なわれ、その度毎に私達は篤く信仰されたものだ。

ところが最近では、私が収穫祭に呼ばれる程度である。それは豊穰祈願では決して無い。刈入れの過ぎた後にしか呼ばれないのは、畢竟人間達が私達に結果だけを見せ付けて私達の神徳を軽んじているのではないか、とさえ勘繰ってしまう。

私とて、そう捻くれた考えは厭なのである。私も秋神としての自負がある。秋は私達の季節なのだ、と誇らし気に思いたいのだ。けれど私はある悩みから、そうした考えばかり持つようになってしまった。私は始終、煩悶とした。いつしか私は、叶うことなら神無月の謂われの通りこの地を去ってしまいたい、とさえ思うようになった。

そうした考えは、私の胸にいつも燃え立つ紅葉のごとき鮮烈さを与えた。けれど決まって、枯木のような虚しさと落葉のようなわだかまりが後に残り、どうしてもそれを蹴散らして、前へ進むことが

できなかった。その時私の心の片隅には、必ず誰かが佇んでいる気がした。私は果敢無いその人を胸の内で認め、私を映すその瞳を心の内で捉えて、ただ煩悶とし、倦怠感ばかりを募らせた。

焼き立ての美味しそうな香りがするね、という声が出た。焼き立て、という言葉に反応して声のほうを向くと、姉が屈んで私を見ていた。にこにことして悪びれない表情に、皮肉や冗談といった色は伺えなかった。姉はどこまでも自然に、姉然とした表情で私を見ていた。どうやら姉は真面目に、そんな疑問とも同意とも付かない発言をしたらしい。

すっかり毒気を抜かれた私は、ようやく体を起こす気になった。上半身だけを起こしてみると、おなもみ施やらせんだんぐさ梅檀草の種が背中から剥がれて、ぱらぱらと音を立てた。足を起こして立ち上がる際にも、寄る辺を失った秋の種の剥がれる音は続いた。私は居住まいを正し、袖や前掛けを叩いた。姉は私の後ろに立って、種を取ってくれた。

「お洋服を洗うしか、仕様が無いわ」

姉の掌には、ちぢみみみ縮笹やぬすびとはぎ盗人萩の小さくぺたぺたとした種が、幾らも添えられていた。私の衣服にはまだ沢山の種が、傷や汚れと一緒に絡まっているらしい。思わぬ所で秋の洗札を受けたものだ。私は姉と共に、ただ苦笑した。

そうした姉の姿は、私よりも一段と秋そのものであった。楓の前差しをして、紅葉色の衣装をまとい、茜色のぼかし染めのスカートを穿いていた。ただ、常よりは幾分かくすんだ色をしており、至るところにほつれや焦げがあった。けれどその理由は、私にもよく解っていた。姉は私の視線が気まずいのか、はにかみ顔をして、痒くもないえくぼを掻いていた。

つい先程の話である。閉山を前に、私達は妖怪の山を訪れていた。そこから麓へ下ったところで魔法使いに出会い、二柱揃って打ち負かされたのである。

私達は、秋になると決まって、紅葉や稔りの具合を確認しに各所を巡っていた。それはある意味で、私達の生業なのだった。人間を始めとする動物は、美しい紅葉を見、豊かな稔りを得て、秋を感じる。それが私達の信仰となるのである。今日もそうして妖怪の山を巡り、まだ日も高かったので麓から霧の湖を一周する予定だった。

先にその気配に気付いたのは、姉であった。困った木枯らしが来る、そう言って里の方へ向かったのである。霧の湖を巡る約束もあり、私は二度手間になるのも厭で、姉が戻るのをここで待った。

里の方角で幾らかの光線と火花が散った時、私は姉に何事かあったに違いないと思った。ややあって、誰かがこちらへやって来るのが見えた。案の定、それは姉ではなかった。

それは大きな三角帽を被った、黒白の魔法使いであった。といっても、彼女は捨虫の法も済ませていない人間であった。種族としての魔法使いは一種独特の雰囲気があるので、私にはそれが一目で判断できた。

そして恐らくは姉にもそれが判り、入山を止めようとしたのだろう。というのも、今季の山は、少しばかり事情が違っていたのである。だのにこんな場所をうろつく人間は、莫迦か野次馬のどちらかに違いなかった。

そもそも妖怪の山は人間にとって危険な場所である。特に閉山を迎える頃は、妖怪共も冬支度で気が荒く、山の神も多忙で、人間に構う余裕など無い。そこへ人間が邪魔しようものなら、最悪里を巻き込む一大事になりかねない。やぶへびになる前に帰らせたほうが



良いことは、子供にも判る理屈であった。

それにしても木枯らしとは、姉も中々詩的に評したものだ。成程私にもその人間は、秋口に吹く向かい風程度に飄々として見えた。けれど私は、木枯らしと言われて山の天狗のようなものを想像したので、まさか人間とは思わなかった。だから私には、その人間がそこまで物凄い者のように見えなかったのである。ところがいざ決闘の段になると、私は姉の鑑定眼の鋭さに全く驚かされることとなった。

目の前の魔法使いは、まさしく姉の言う通りの者であった。決闘開始と共に、私は厭という程痛いレーザーで焼かれた。挙句、緊急回避のスペルカードさえ靈撃でばんばん落とされたのである。決闘どころの話ではない。まるで恐るべき烈風のごとく、私の何もかもを根こそぎにして去って行った。成程それは「困った木枯らし」というより他に言い様がなかった。

かくして焼き芋の気持ちを十二分に味わった私は、姉も恐らく落葉焚きの気持ちを十二分に味わったのだろうと思い、秋の枯野に身を委ねたのである。

煤だらけの姉は私に先立ち、午うまの方にある人間の里へと足を向けた。しかし霧の湖はここから坤ひつじきの方角である。私は不思議に思っ、どこへ向かうのかを姉に尋ねた。姉は首だけを振り向かせて、今日は疲れたから帰りましょう、と答えた。

姉は私と違い真面目な質なので、その言葉は少なからず私に驚きを与えた。けれど、その事も無げな口調に、私もまた、それもそうだなと納得した。私は姉に連れられるようにして、人間の里へと帰った。



私達は随分昔から、人間の里に住んでいた。切っ掛けは里のとある百姓家からの勧めであった。特にその家の主は畑仕事に熱心で、私達を篤く信仰していた。彼は豊穰や紅葉を司る私達を、是非この里へ迎え入れたいと申し出た。そうして終いには、私達をこの小さな祠へ祀り上げてしまったのである。今は彼の百姓家も代替わりを連ねて久しく、相当な家柄となつたらしい。私には当時の彼ばかり印象に残っていたので、現在の子孫がどういった人間なのかはよく知らないでいた。

そして今では、私達にとつても、この祠が一番の拠り所である。里には至る所に祠や石碑があり、里を隔てて反対側にも、もう少し大きめの御社が建てられている。けれども私達は、好んでこの祠に宿っていた。

祠は里の乾<sup>いぬい</sup>の方にあつて、小高い丘から田園を見渡すように建っていた。祠のそばには一本の立派な楓があり、この時期になると沢山の落葉を丘に敷いて、見事な茜色に染めた。それはさながら、夕日のようなであつた。

祠から見える田園は、夏場には青葉が軽やかに波打ち、秋口にはそれが黄金色の穂を付けて、海原のように力強くうねつた。今の時期は刈入れも済んで、齒脱けのような寂しい地面をしている。けれどそれもまた情緒ある風景なのだった。この圃場は昔からあまり形を変えないので、畦が面白い形にねじくれていた。丸いような角ばつたような不思議な田圃は、人間の里本来の、長閑と安穩を物語っていた。

その向こうには、人間の里の中心街が小さくまとまっていた。窮屈そうなそこには、幻想郷の殆どの人間が身を寄せ合つて暮らして

いた。そこからは度々、子供のはしゃぐ喜び声や、老人のがなる怒り声、誰某<sup>だれそれ</sup>の死を悼む哀しみ声や、誰某が子を成したという楽しみ声などが聞こえた。そうして特別な何かが無くとも、人間の生活する雰囲気、終始ざわざわとして届いた。小さくまとまった里は、それ自体が一つの生き物のように澆刺<sup>はつらつ</sup>としていた。

「茸がお供えしてあるわ」

姉の言葉に目をやると、確かに祠の前には占地<sup>しめじ</sup>だの木耳<sup>きくらげ</sup>、滑子<sup>なめこ</sup>とあった、じめじめしたものが籠にこんもりとしていた。食用茸に混じって紅天狗茸<sup>べにてんぐだけ</sup>も一本入っていたが、籠と一緒に硬貨が一枚置いてあったので、それも含めて供物に違いないようだった。いずれも長く日に当たったため、少しばかり乾いていた。その具合からすると、私達が山へ向かった後に供えられたものらしい。

秋の稔りを祈願するために参拝客が来るのは、実際珍しい事であった。私達秋神を祀った御社はそちこちに在るが、この祠は里の中心から一番遠く、稀に近場の一軒家の老人が、田を打ちがてら覗きに來る程度であった。といって信仰が無いわけではなく、里の人間の殆どは、異方<sup>たつみがた</sup>にある御社に参拝するのが常であった。

そのうえで、この供物は更に珍しく私の目に映った。秋の稔りを捧げて供物とするのは普通ではあるけれど、茸しかない。里にも椎茸農家はあるが、それにしては自然に生えた茸ばかりである。加えて紅天狗茸を添えたところなど、私はこれが素人の仕業では有り得ないと思う、にやりとした。こんな豊作祈願であれば、是非とも叶えてやりたいように思った。

私はそれを、今晚にでも茸汁にして頂戴しようと提案した。姉は鹿爪らしい顔をして、毒茸は厭だわ、と言った。姉にも茸の知識は多少あったが、残念ながら紅天狗茸の旨さを知らない素人であった。私は姉に口先だけの了解をして、鍋には全ての茸を入れるつもりで居た。

私は汚れた衣服を着替えてから、祠の外で茸汁の準備に取りかかった。神として在る私達は、そのために食事を摂る必要はない。けれど信仰の形として、こうした食材を供えられた折に、私達は必ず調理して食うことにしていた。それは食材を通して信仰を得るための意味もあり、また食材に対する敬意もあった。

その際には姉もよく落葉焚きをして煮炊きを助けた。姉が言うには、それも秋の紅葉に対する敬意なのだそうだ。落葉焚ききは秋の情景の一つなので、紅葉の神格が上がるものらしい。直接的な私の場合とは違うので、私にはまいち呑み込めなかった。

ただ今日は、姉が私を手伝うことはなかった。争い事を好まない質の姉は先の騒動で酷く疲れたと見えて、着替えるなり祠に宿って寝てしまった。私はその方が都合良かったので、姉をそのままにした。

幸いこの丘には落葉も枯れ枝も十分にあるので、煮炊きには困らなかった。私はまず竈<sup>かまど</sup>を準備して、その上に土鍋を据えた。竈は楓の木の裏手にある、盛土をえぐった簡素なものである。土鍋は本来土器としてこしらえたものだが、繰り返し鍋物に用いたところ、いつの間にか火に強くなってしまった変種である。またそれは土器としても土鍋としても長く愛用したので、色々な味が器に染み込んでいた。だからそれで煮炊きをする、器からの出汁で煮物が何とも言えない豊かな風味になるのだった。

土鍋には先程の茸を入れた。紅天狗茸は判らないように、小さく千切って鍋の底のほうに隠した。そうして汲み置きの水を半分くらい張って、栓の蓋をした。蓋は土鍋の口より幾分小さく、茸と一緒にぷかぷか浮いた。後は火を炊いて、放っておけば旨くなるのである。

祠には古い燧石ひうちいしがあつたので、それで火種を点けた。誰が置いたものかは知らないが、燧石は厄除けにも用いられるので、これもそうした意図で置かれたのだろう。細い枯れ枝を添えた黒曜石に刃金を当てる、ちん、ちんという鋭い音を立てて、火花が散った。その時私は、姉が今日に限って落葉焚きを手伝わなかったのを、やはり先の騒動で厭な思いをしたからに違いはないと思った。火種はすぐに点いて、竈の落葉を良く燃やした。

茸汁のできるまで時間があつたけれど、火の元から離れるわけにもいかなないので、私はぼんやりと里のほうを眺めて座っていた。そうして気付けば、齒脱けのような田圃のそこかしこに幟がはためいていた。恐らく私達が山へ行った後に、里の人間の手によって立てられたのだろう。

幟には「幻想之郷新嘗神事祭禮」としてあつた。一字一字が筆を垂らしてきちりと四角に書いたような、良く言えば古式ゆかしい字面しょうめんをしていた。小篆と呼ばれる書体である。古式過ぎて私にも正確に読めないが、大方そうした漢字が宛ててあるのだろう。その他には「猷幻想之郷稲田御子神」などとしてある幟も見えた。これに至って、私は閉口せざるを得なかった。

ひやりとする風が吹き始めた。黄昏とまではいかないにせよ、日はもう暮れ始めていた。この頃は夜になると随分冷える。申さるの刻も過ぎれば、気候の方も夜の準備を始める。秋の日の釣瓶落としての通り、夜になるのは早い。

そうして明日が来て、また夜が来て、秋の日は過ぎて行く。冬になる前には、収穫祭も例季通り執り行なわれるだろう。作物は今季も豊かに稔ったのである。だからこそ、こうして幟が立っているのだ。

ぼつり、と雫の打つ波紋のようなざわめきが、私の胸中を渡った。私は呆とする時間のなかで、かの妄念に再び取り憑かれる心地を覚えた。

幟のばたばたと騒ぎ立てる音が、私をあざけている。里のざわついた気配が、私をけなしている。そう思うと私には、もう何もかもが厭なものにしか見えなくなった。一刻前には平気で居られたことにさえ、私は目を潰し耳を裂き、胸が破れるほど叫びながら遁走してしまいたくなった。

私の眼前には、ある小さな問題が転がっていた。それは私の心を倦怠させるべく置かれたような問題であった。それは刻一刻と私に近付き、もうすぐ足下にころりと転がるものである。そして私は、それをどうしても除けられず、きつと蹴躓いて、よろよろと心をさ迷わせる愚図なのである。

聞く者が聞けば、まるで莫迦のような問題かも知れないが、私は数日後に迫る人間の里の収穫祭が、酷く厭なのだ。とはいえ私は里も人間も嫌いではなく、収穫祭自体、呼ばれる分には喜ぶのである。ただ、例季執り行なわれる収穫祭は、私ばかりが呼ばれるのだ。

私にはそれが、どうしても得心いかないのだ。姉の呼ばれないのが、どうしても納得できないのだ。そして姉の、どこか達観した者のように収穫祭へ参加しようとしもないのも、私には厭で厭で仕様が無いのだ。

人間が私達を信仰し、豊作も続くようになった頃、収穫祭へは姉も一緒に参加していた事を覚えている。初めて呼ばれた収穫祭の記憶は、未だ鮮明である。

姉は里の男衆に酒を勧められるのを、止せば良いのにごくごく飲んで、紅葉よりもなお紅くなり昏倒していた。男衆はその後大変慌てて、里の女衆にしこたま絞られていた。私は意に介さず芋ばかり

むしゃむしゃ食って、子供衆の注目を浴びていた。ことに老人衆のこしらえる芋料理が大変旨く、私は里の芋の備蓄を食い尽くさん勢いで料理を平らげ、皆を大いに驚かした。

老若男女、人も神も皆楽しい一時を過ごしたことを、今も鮮明に記憶している。その後も毎季、姉妹揃って参加していたはずである。

姉はいつからか、収穫祭に参加しなくなった。その頃には確かに姉も呼ばれたはずなのだが、姉は頑として参加しなかった。切っ掛けが何であったかは、今も解らない。けれど、別段姉にすねた処もなかったのだ、収穫祭を嫌っているわけでは無いようだった。だから私も、つい姉に問い質すこともせず、次は参加するだろう、また次は参加するだろうと、受け身になって過ごしたのである。

けれどもその数季後、里からの招待はついに私にだけ宛てられるようになった。その季の収穫祭で、私は里の老人に事の次第を尋ねた。楽しげに執り行なわれる収穫祭に水を差す訳にもいかないので、たけなわ宴も酣となった頃合いに、少し遠目に席を移して、よく見知った顔の老人を見付けて聞いたのである。

彼は祠の近くの一軒家に住む老人であった（余談だが、現在住んでいるのはその老人の息子にあたる）。彼は少し困った顔をして、若え奴等は気が早えで、中々御出で下さらん姉神様に、いよいよ業を煮やしたに違えあるめえ、と言った。姉を呼ばないのは祭礼としても間違っていたが、呼んでも姉は来なかったのだ、私もそれ以上何も言えなかった。その夜私が祠に戻った時には、姉は既に寢息を立てていた。

それぎり私は、結局姉にも里の人間にもはっきりと談判できず、いたずらに時間を過ごしたのである。私の煩悶は季を経るにつれて膨らみ、大変な重荷となって私の精神を苦しくさせた——今ではもう、その重荷も私の精神も、瓦解寸前にまで来ている。

私は、里の人間が姉を招待せず、姉が収穫祭に参加しないのが、大変に心苦しかった。単に私だけが美味しい思いをしている後ろめたさとか、私だけが里の面倒を見なければならぬ責任とか、そうした自分本位の考えだけでは決してない。それは取りも直さず、第一に認められるべき姉の神徳が、里の人間に理解されていないのだ、という懸念から来る心苦しきであった。

私は豊かさと稔りの象徴だが、神徳においても全くその通りである。植物は春に芽吹き、夏に繁り、そうして秋に結実してたわわに実を付ける。私の領分は、そこまでである。穀物も果実も、ただ瑞々しく青々とした肉を付けるだけだ。実を成熟させるのは、姉の領分なのだ。

姉は寂しさと終焉の象徴などと言われるが、人間にとって重要な姉の神徳は、その過程にこそある。紅葉や枯葉は、姉を象徴する最たる例だが、紅葉とはそもそも葉中の糖分が日光の……いや、細かい話はどうでも良い。つまり紅葉は、葉が成熟した姿なのだ。そうした姉の神徳は紅葉に限らず、穀物も果実も同様に授かるのである。人間は熟れた作物を食料にするが、それには姉の、植物を成熟させる力こそが重要なのだ。

だからこそ、人間に感謝されるべきは私よりも、むしろ姉である。姉こそ、人間にとっての豊穡神なのだ。私はただ、植物の実を大きく太らせるだけだ。それは本来、植物にとっての益でしかない。

植物は、次代への足がかりとなる種さえ確りとしていれば、また春に芽吹き、夏に繁り、秋に結実できる。あえて熟成させる意味は無い。あるとすれば、種を遠くへ運ぶため、鳥獣に食わせる目的くらいのものだ。それにしただけで、植物を食って生命を永らえる鳥獣のほうに余程益になるのだ。第一、種を遠くに運ぶなら、蒲公英の



ように直接飛ばせば良い。植物には、人間やその他動物を養う義理など無い。だから私の神徳だけでは、人間の信仰を受けるに値しないのだ。私は秋静葉という姉神が居て初めて、人間の信仰を受けるに値する神なのだ。

それなのに私には、姉が自身の神徳を認めていないように見えた。そして里の人間も、姉を正当に評価していないように見えた。私には、姉の態度が卑屈に見えてならなかった。人間の態度が無知に見えてならなかった。姉は既に、人間の信仰から遠ざかってしまったように見えた。

信仰が得られなければ、私達の存在は無いも同然である。いや、存在すべきではないのである。だからそれは姉の、卑屈から来る自棄にしか見えなかった。

「お鍋が嘔いているわ」

突然の声に、私は我に返った。振り返ると、姉が鍋の蓋をつまんで中を覗いていた。唇を舐める姉の表情は、悪戯をする子供のよう  
に無垢であった。

姉の足下には、小さな石がころりと転がっていた。



竈の火はもう尽きていたけれど、鍋からは今もほくほくと湯気が立っていた。日も暮れて少し肌寒かったので、姉と私は寄り添って茸汁を食うことにした。汁は程良い分量まで減って、十分の濃さの出汁になっていた。それをぐるぐると絡め、二柱の椀によそった。

姉は茸汁を絶賛した。よく蒸し上げられた茸は歯応えが良く、噛めば旨味のある汁が、口の中で秋桜の開花こすもすのようにぱつと広がる。その汁がまた、爽やかな秋の日和にも似て、舌と喉を優しく包み、後へ引かず潔い。噛めば噛む程味わい深く、飲み下すのさえ惜しく感じる。けれど出汁と調和した茸の喉越しにも、秋風に揺れる木立ちのような、果敢無くも鮮烈な刺激があり云々。姉の感想は大概見当違いな詩的表現で間怠こしつこしいので、結局旨いのか旨くないのかよく解らない。なので私は日頃から、そうした姉の念仏を聞き流すことにしていた。

そうでなくとも今の私には、姉がさも旨そうに食う茸汁を、旨いと感じ得なかった。出汁の味は、泥水のように重たかった。茸の歯応えは、砂を噛むように不快であった。幾ら噛んでも、幾ら飲み下しても、姉とはまるで正反対の心地がしたので、私は一杯目の茸汁を半分程口に運んだところで箸を置いた。私は明らかに、別の何かに囚われて、食事に集中できなかったのである。

姉は口をもぐもぐと動かしながら、不思議そうに私の顔を見た。私はその姉の顔を見た途端——どろどろとした茸汁が、私の精神を汚して、そこから先程の妄念がぶり返し、襟首をつかんで揺さぶるように、私の精神をもみくちゃにして、私の内の何かが、ばらばらと、がらがらと崩れて——

「姉さん、今季の収穫祭は如何なさって」

私の声に似た、音が聞こえた。それは私の姿をしたものから発せられた、まるで無意識に抜け出たような音だった。当の私は、ごく冷静に現状を把握していた。いや、正確には感情に邪魔されず状況を眺めていた、と言うべきか。私には思考だけが残り、その他全部を体ごと姉の横に据えて、硝子がらす越しに第三者たる私の体を見ている。そんな冷静さで、私の思考は私の体と姉を見ていた。

姉はその言葉に一瞬、目を丸くした。そうして何事か考える顔をして口内のものを飲み下し、たった一言、御免なさいね、と言った。

それは化学反応のように劇的であった。私の思考は、私の体が電気に打たれたように、びくり、と立ち上がり、姉を恫喝するのを見た。痛いくらいに体中を硬ばらせて、ぶるぶると震えながら姉を罵倒するのを見た。姉は何が起きたのか解らない顔をした。はたから見ると私の思考にも、私の体は何をしているのか解らなかった。

私の体はなおも、姉を悪しざまに罵り続けた。終いには罵りなのか叫びなのか嗚咽なのか判然としなくなったが、私の体から発せられるその音は、明らかに姉に叩き付けるためのものであった。私の思考は、私の体を止める手立てを持っていなかった。感情に邪魔されない私の思考は、感情の命ずるまま動く私の体を眺めるだけの、傍観者であった。私の思考と姉の前には、口も裂けんばかりに醜く歪んだ顔の、般若が居た。

そこで私の思考はぼんやりと浮いてしまったように思う。断片的に、妬みの色で黒く染まった景色や、怒りの色で赤く染まった景色を見た気もする。私の思考が私の体に戻ったのは、それから数刻経った後であった。

私はまず、ここが何処で今が何時かを判断するより前に、ああしまった、と思った。そうして両手で顔を覆い、その場にくずおれた。掌に覆われた視界は黒く、目頭を強く押さえると、眼球に走る血潮の赤が混じって見えた。それは私の心の塊なのだと思った。

べたべたに濡れた掌をじっと見つめると、掌は次第に霞んで、その上にまた新たな雫がいくつも滴った。いくら目を拭いても、いくら雫を払っても、掌はいつまでも乾かなかった。私にはもう何も見えなくなってしまった。そしてそうならば、もう何も見なくても良いとも、何も見たくないとも思った。そうしてその場にうずくまり、

掌を濡らし続けた。

## 豊かさと稔りの象徴の場合 其乃二（前書き）

※東方Projectの二次創作物です。嫌いな方はごめんなさい。  
※Firefox利用者の方は「XHTML ルビサポート」が便利です。

<https://addons.mozilla.jp/firefox/details/1935>

## 豊かさと稔りの象徴の場合 其乃二

黒と赤だけの私の視界が、薄く白みがかかるのに気付いた。顔を上げると、小高い山の向こうから、一筋の朝日が目映く見えた。辺りは朝靄に包まれて、天界の雲のようであった。

すわ神無月の謂われの通り、私も神々の住まう土地へ至ったかと焦ったが、よくよく見れば山には博麗神社が見えるし、靄の合間には見知った田畑もあったので、ここがまだ人間の里である事が判り、ほっとした。

そうして私は、一瞬前のほっとした私を、救い難い莫迦だと思った。

私は今まで、何を考えて過ごしてきた。私はそうして、姉に何をした。私はここに至り、何故安堵した。姉が卑屈だから、人間が無知だから、そこで私は何を為した。ただ心を鬱屈させて、苛立ちを募らせて、敬うべき姉に穢らわしい呪詛をぶち撒けたただけだ。私は莫迦だ、救い難い大莫迦者だ。

私の震える掌は、知らず真向かいの杉の幹をつかんでいた。私の頭は、きつと膿<sup>かぶ</sup>んでいる。きつと気触<sup>かぶ</sup>れている。だからそんな、むずむずしてもどかしく頭を狂わせて、人前に頭垢を掻き散らすような、恥を恥とも思わない行為に及んだのだ。そう思うや否や、私は落涙して叫んだ。そうして体ごと大振りに、私の頭へと杉の太木の一撃を与えた。太木はちつとも動じなかった。代わりに私の頭は十分以上に反動を受け、足をもつれさせて仰向けに倒れた。

暫く、ちんちんとする額を朝靄に晒した。朝靄は、火照った頭に程良い冷たさを与えたが、体にも氷のような冷たさを与えた。衣服は朝露と泥にまみれて、ふやけたように感じた。こんな姿では、姉

の許に帰れないと思った。

私が先程までうずくまって居たのは、巽方たつみがたの御社の境内裏であった。ここに居ても姉が来るかも知れないけれど、ひとまず私には落ち着く必要があったので、社殿に入ることにした。

御社の中は、二畳の板敷の外陣と二畳の畳敷の内陣が、仕切りなく続いていた。内陣には小さく簡素な祭壇があって、ふちの欠けた青銅の鏡が奉納されていた。鏡の表面はぼんやりとして、私が前に立つと、薄暗いなかに少しの土気色を返した。正面の障子戸以外に明かり取りはなかった。障子紙も薄汚れていて、戸口をぴたり閉じると、陣中は夜のように暗くなった。

私は板敷の上を、暫くの間とぼとぼと往復した。私も一応神の端くれなので、その鏡を依代として宿ることもできた。実際いつもの祠は、大人の手がようやく納まる程度の大きさしかないのです、依代が鏡であれ問題ではない。けれども私はこの時、この御社に長居するつもりがなかったのです、顕現したまま陣中に居場所を探した。たっぷり半刻程とぼとぼした挙句、私は板敷の隅に腰を下ろしてうずくまった。そうしている方が、今の私にはお似合いな気がしたのである。

私は姉に見付かるのも厭で、少し体を休めたら出ようと考えていた。けれど意外にも姉はやって来なかったのです、私はそのまま数日間を御社で過ごした。

御社の中は寒く、埃っぽかったが、私にはただ居心地が悪いだけで、体調を崩すことはなかった。同様に、私の心も変調しなかった。私は変わらず心を暗くして、莫迦な自分に愛想を尽かしたまま居た。そんなだから多分、姉も愛想を尽かしてここに来ないのだと思った。私がそうして居た数日の間、御社の外からは、飛び交う小鳥のさ

えずり、木立ちの葉がすれ、無言で歩む人間の足音、遠くでする犬の吠え声などが時折聞こえた。そうして後はただ、しんとしていた。私は何も考えずに、それらを聞いて過ごした。

数日が過ぎたある日、遠くで太鼓を叩く音がした。多分それは、じき執り行なわれる収穫祭に向けた練習だろう。低音で響く破裂音は、御社の壁や柱と共に、私の心を芯から震わした。その時ばかりは、私も目を瞑って耳を押さえ、体を固くしなければ居られなかった。姉から逃げて、自分からも逃げて、それでもなお憩える場を得られないのを、私はとても苦しく感じた。

同日の夕刻、私は障子のすぐ向こうに、賽銭の投げ込まれる音を聞いた。続いて二拍する音と、何やらがさがさという音と、何者かの独り言を聞いた。私はその声が妙に気に障った。姉ではない。祠付近に住まう老人の声でもない。といって里の人間の誰某の声でもなく、収穫祭で見かける博麗の巫女の声でもない。それでもその声には、確かに聞き覚えがあった。

がさがさいう音はずっと続いたので、私は焦れったくなり、追いつ返そうと思って障子の隙間から外を覗いた。

「これで全部か。ええと、神さん仏さん、来季も茸を沢山……アッ、何だ。吃驚したぜ、誰だお前」

私が様子を伺うと、同時に相手も私に気付いた。私は隠れて行動する気もなかったので、ゆっくりと障子を開けた。外の景色が闇色の社殿になだれ込み、悉皆茜色に染めた。私の目の前には、秋茜あきあかねの舞う田畑と、茜色をした夕日とを背にして、闇色をした影法師が居た。



影法師は、いつかの黒白の魔法使いであった。彼女の前には、私に驚いて落としたものか、沢山の茸が散らばっていた。それは自然で採れるようなものばかりだった。

彼女は居住まいを正して、お前は疫病神か何かか、と私を評した。成程私は着の身着のまま、薄靄がかかる畦道を素足で走ってここに至り、埃まみれの御社でうずくまって居たので、酷い有様であった。そしてまた、心根も似たようなものである。今の私は誰に言わせても、疫病神か貧乏神のどちらかにしか見えないだろう。

私はしかし、相手が一応参拝客であるようなので、これでも秋神である旨を返答した。倦怠した頭とする返答は、いささか無愛想になった。彼女は殊更に疑わしい目付きで私を見たが、私の顔や身なりに覚えがあったものか、そう言えばこんな奴居たな、と言った。

「まあそんな事はどうでも良い。あんたが秋神なのなら、斯々然々かくかくしかじかで、来季もひとつ茸を頼むぜ」

黒白の魔法使いは、不躰に豊穣を祈願した。そうして胸を張ったまま、齒を見せて得意気な笑顔をした。その物言いが、姿が、表情が、ことごとく私に不快を与えた。彼女の一言一言が、膿んで気触れた私の頭を刺激した。そうして私の胸の内は、毒虫に刺されたように苛ついた。

私はくさくさする気分を抑え、やつとの思いで謝礼を述べた。けれど恐らくはむくれっ面であつたらうから、巧く彼女に伝わったかは知らない。どうしても良いから、用が済んだのなら早く帰って欲しかった。

けれど彼女は容易に去ろうとしなかった。何だそれだけか、とおも私に食い下がり、昨今の魔法の森の茸事情だの、妖怪の山や博麗神社のある小山の珍しい茸の話などをした。私は下らない話に耳を傾ける余裕もなかったので、うつむき唇を噛み、御社を下りて、

ゆっくりと歩き出した。相手が去らないのであれば、私が去るしかない。何処へ行く宛も無いけれど、ここよりは静かなところへ行きたいと思った。

私の真後ろでは、なおも詮無い話を喋くる声が聞こえた。いくら歩いても彼女の話は止まず、また遠ざかりもしなかった。境内裏の一角へ至った時点で私は堪えかね、耳を押えてうずくまって見せた。そうして、良いからもう放っておいてくれ、頼むから帰ってくれ、と懇願した。彼女はすぐ、何だ調子が悪いのか、ならそう言わなければ判らんぜ、と取って返した。

けれどなお、彼女は去ってはいくれなかった。私の真後ろで腕を組み、じっと佇んでいるのが感じられた。そうして次の瞬間、そいつは巫山戯た事を口走った。

「この時期、秋神様ともなると気苦労も絶えんのだろうぜ。中には植物をすっかり枯らしちまって済ますだけの秋神も居るんだから。あんたの姉だろう、紅葉の神だかい」

「姉さんを莫迦にするな」

私はやおら立ち上がり、本気の目で黒白の魔法使いを睨め付けた。

「何だ、別にあんたの事じゃないだろう。しかし里の人間も、きつとそう思っているのじゃあないか」

「姉さんに謝れ」

「だってそうだろう。少なくとも私は、あの神さんが何故秋神なのか解らん。寂しさと終焉が秋のなら、貧乏神だの死神だって秋神だぜ」

「姉さんに謝れ」

「そう尖るなよ。私ら人間には、あの神さんが解せんのだ。あんたは豊かさと稔りだから、解り易いがね」

「姉さんに謝れ」

「何だ取り付く島もない。あんたはそう思わないのかい。けれど収穫祭にあんたの姉が来たのを見た事がないぜ」

「姉さんに、謝れっ……」

どうした事だろう。私はこの無礼な魔法使いに怒っていたのだけれど、頬には哀しい涙ばかり零れた。頭は確りしている。彼女を咎める度、頭はむしろ冷静になったので、私は静かな怒りをもって彼女と対峙できている。けれど瞳は冷たく霞むばかりで、彼女の顔もよく見えなくなった。



「落ち着いたか。悪かった、別にそうまで厭な気持ちにさせたかった訳ではないんだぜ。そうだな、売り言葉に買い言葉というやつだから、気にしないでくれ」

黒白の魔法使いの言葉に、棘は無かった。だから私もそれ以上、彼女を悪く思うのを止した。

以前勝負にこっ酷く負けはしたが、あれも勝負である。姉をけなす言葉には怒りを覚えたが、もう謝ってくれた。だからそれ以上恨む必要など無いのだが、気持ちというものはそうすぐに分別を付けられるものでもないようで、私は泣き出した子供のように、いつまでも愚図って、彼女を困らせた。

それでも私は、もう幾らか落ち着きを取り戻していた。私をそうさせたのは、誰であろう目の前の彼女であった。

先程私が嗚咽し出すと、黒白の魔法使いは掌を返すように、あっさりと謝罪した。彼女は涙にむせぶ私を見ても、特に顔色を変える

事も、慌てふためく事もなかった。ただ少しばかり宙を睨んで考え事をしてから、全くさっぱりとした顔で謝ったのである。後から考えると妙な具合だが、その時私は彼女の態度を、随分大人であるように心の内で評した。

実際それからの彼女の対応は、淑女然としていた。彼女は私と一緒に境内裏の壁にもたれて座り、巧みに私を慰めた。人をなだめるのが上手いと言おうか、子供をあやすのが上手いと言おうか。後者であれば、それはそれで随分失礼な気もするけれど、ともあれ私の心は徐々に静かになり、哀しさは鳴りを潜めた。

「ところで、全体あんたの姉はどうして秋神なんだろう……いや、まあ聞け。私はな、人間だ。だから人の心は推し量れるが、読む事はできん。どうだ、あんたがそこまで姉を慕うなら、ひとつ私にも解るように聞かせては呉れまいか」

突然話をぶり返されて、私はまた、哀しい気持ちに襲われる気がした。けれど今度は、そうした気持ちにならなかった。黒白の魔法使いは私の顔を見つめて、期待の籠ったような笑顔をした。私は何だか、これから壇上で大勢を前に演説をするような、妙な気恥ずかしさを覚えて、胸が高鳴った。たかが、姉の重要性を一介の人間に諭すだけの事である。それなのに何だか惜しいような、勿体付けるべき事のような気がして、もじもじとした。

もう鼻も出ないし、喉も震えないので、声はすんなりと出るようだった。けれど私は、ああ、だの、うう、だのという声を漏らして、容易には話す素振りを見せなかった。暫く私はそうしていたが、次に彼女の猫撫で声をしたおねだりを聞いて、仕方無いわね、と洩るように話を始めた。

ぽつ、ぽつと話す私の声には、我ながら随分と優しさが籠っていたように思う。それは私達の信仰に繋がるからなのか、愚かな人間

を論してやる善意からなのか。それともそれは、大好きで自慢の姉の話だからなのか。私が皆に知って貰いたい、本当の姉の話だからなのか。

多分私は気付いているのだけれど、それを意識すると、きっと話ができなくなる気がしたので、私は神として、前者の思いから来る優しさなのだと思うことにした。そうしてなるべく姿勢を正し、威厳あるようにして、隣に座る彼女にゆっくりと説いて聞かせた。

姉の能力は収穫に欠かせない事。

私の能力だけでは人間に収穫を与えられない事。

人間がそれを理解せず、姉をないがしろにしている事。

昔は姉も収穫祭に参加していた事。

今参加していないのは、何か訳があるだろう事。

そうして人間にも、それをまず理解して欲しい事。

私は、私の思う秋神としての姉を、順を追って話して聞かせた。

彼女は終始表情を崩さず、時折相槌を打つようにうん、うんとうなずき、ずっと私の話を聞いていた。

だからきくと、私の話し振りは堂に入り、霊験あらたかに彼女の耳へと届いたはずであった。私は決して、燥ぐ子供が母に甘えて得意がり、自分の快く思う与太話を鼻高々に語るようだとは、思わないことにした。

私が話し終えると、黒白の魔法使いは感心したように一つ大きく頷いた。それから暫く間が合いたので、すっかり話した後に残った私の胸の興奮も、彼女の次の言葉を受け入れるまでには冷めたようであった。

「成程、大変良く理解できたぜ。あんたの姉を疑って済まない事を

した。けれども、まだ一つ疑問が残る。里の人間は何故そうした事を理解していないのだろうか。あんたも里の人間に、そう話して聞かせたのだろうか」

私は二の句を継ぐとして、はたと気付いた。私の持つ明確な回答は、まだ里の人間に伝えていない、という事実である。けれどそれならそれで、彼女はきつとその矛盾した回答の理由を尋ねるに違いなかった。果たしてそれは何故なのか、私は言葉の出ないまま暫し思惟した。

時期を逸して伝え損ねたのもあるだろう。けれどそうした話に、時期など関係あるだろうか。そもそも時期で言うなら、収穫祭を控えたこの時期は頃合いではないか。だのに私は、何故里の人間に伝えないで居るのだろうか。

姉は誘っても収穫祭に来ないのだから、……いや、だから里の人間に伝えていない、という答えにはならない。そも私がこの事を誰かに伝えたのは、この魔法使いが初めてではないかしらん。

何故、彼女には伝えられるのが、里の人間には伝えられないのだろう。姉が、……姉は、私の誇りだ。私は姉の事を誰より認めているから、皆にもそうして欲しい。だから、いや、それなら伝えるべきだろう、里の人間に。私は何故伝えないのだ。伝えない、伝えたく、ないのじゃあないか。

そんな莫迦なことあるか。私は姉を認めて欲しいと思っている。それなら、理解して貰わなくてはいけない。伝えたくない、だなんて、そんな訳がない。私が今まで悩んできたのは、姉の事だろう。その筈だ。

なら、そう里の人間に言えば良いのじゃあないか。それで私の悩みは解決するだろう。そのうえで、姉が収穫祭に参加しないのなら、

それは別問題だ。自分で言っただろう、姉が今収穫祭に参加していないのは、何か訳がある筈だ、と。明確な訳があれば、私も悩みはしないはずだ。ではやはり、姉のせい、なのだろうか。理由を打ち明けてくれない姉の……

違う。違う、姉に非は無い。悪いのは、莫迦な私だ。自分にも呑み込めない、訳の解らないこだわりで、姉への誤解を解こうとしない、莫迦な私が悪いのだ。何だろう、何をこだわっているのだ。そんな必要、……必要があるから、こだわっているのか。姉は、誰よりもきつと凄い姉は、私にとって――

「いやまあ、深く考える必要は無いぜ。里の人間も私と同じ、きつと鈍感なのさ。だけれど誤解があるのなら、解いたほうが良からう。あんたはあれだけ姉の事を確りと考えているのだから、きつと理解して貰えるぜ」

ぼすり、と私の帽子に手をやりながら、黒白の魔法使いは優しく言った。私はまた、泣きそうな、苦しそうな顔をしていたのだろう。彼女が暫くそうして私をなだめるように、繰り返し私の頭を撫でてくれた。

頭に置かれた手がやけに温かく感じ、私は夢うつつとなった。ところへ黒白の魔法使いが、ヤツとばかりに腰を上げたので、私もはっとして目を覚ました。

とつぷりと日も暮れて、宵闇のなかを小さな星が瞬いていた。彼女は左肩に箒を担いで、ぶらぶらと歩き始めた。後ろ手に私へ手を振り、茸の豊作宜しくな、と言った。どうやら家へ帰るようであった。私も付いて行って良いものかと躊躇したところに、彼女はわざわざこちらへ振り向いて、私に姉の許へ帰る切っ掛けを与えた。

「あんたも早く帰れよ。流石の私も、あんたの姉には嫉妬するぜ」

黒白の魔法使いは、歯を見せて得意気に笑った。それが私には清々しく見えた。そうして私もようやく、姉の許へ帰ろう、という気になった。

星明かりを頼りにして、私は里の乾方いぬいがたにある祠へと歩いた。途中、私は幾度となく姉の事を考えた。ここ数日どうして居たかしらん、今はどうして居るかしらん、きっと怒っているのに違いない。そう考えると私の歩みは自然、のろのろと重たいものになった。

けれど私は歩みを止めず、祠を方角と定めたまま、暗い夜道を歩いた。姉が怒っていても良い。私が厭だと言われても構わない。それでも私は、どうしても姉に会いたかった。私は莫迦だから、姉がどんなに私を嫌っていても、今はただ私が会いたくて帰るのだ、と思っ  
て歩みを進めた。

煌々と輝く星空の下、小高い丘の上に懐かしい祠が見えた。ここまで重い足取りで来た私は、あと数歩のところで、しかし躊躇して立ち止まった。

どうしても姉に会いたい。会って、謝りたい。今までのことを洗いざらい話してしまって、また姉と一緒に居たい。そのために私は、どんな罵倒も甘んじて受け、いくらでも贖罪しようとさえ思っていた。けれどもこうして姉の居る祠を見てしまうと、私はまた怖気付いた。

許して貰えなかったらどうしよう、心から厭に思われたらどうしよう。結局私は、莫迦であった。愚図であった。どれだけ必死に自分を焚き付けても、自分を騙すことすら出来なかった。あれだけ姉をないがしろにしても、自分がそうされるのが耐え難かった。私は、



自分が姉に謝る資格すらあるのか、解らなくなってしまった。哀しい程解らなくなって、歩くことができなくなってしまったのである。

「……穰子」

びくりとした。声のした方、祠のそばには一つの影法師があつて、私を見下ろしていた。楓の葉の前差しに、楓の葉を模したスカートを穿いた影法師が、ゆらゆらと私の方へ歩み寄るのが見えた。

私は金縛りに遭つたように、その場を動けずに居た。声を出そうにも、金縛りに喉をやられて声が出せなかった。ゆらゆら、ゆらゆらと近づく影法師は、近づく毎に星明かりを浴びて輝くように、はつきりとした姉の姿を得ていった。姉は、——ああ、姉の姿は、私にはとても懐かしくて、とても眩しくて。

「穰子……ああ、穰子。良かった、本当に良かった。私は貴女が帰ってきてくれて、本当に嬉しいわ。もしかしたら、もう貴女は帰ってきてくれないのかと、私を厭になつてしまったのではないかと、そう思うと哀しくて、寂しくて……ああ、穰子。有難う、帰ってきてくれて、本当に……」

「……」

私を包み込む姉は、とても温かだった。強く抱きしめる姉からは、ただ本当に私を心配し、戻つたことを喜ぶ、そうした力ばかりが籠っていた。いつまでも肩を震わせる姉からは、熱いものが止め処なくあふれ、私の左肩口を濡らした。

私は、怒られるのだと思っていた。厭がられるのだと思っていた。けれど姉は、ただ私を抱きとめて、ただ喜んで。何て、何て——嬉しい事だろう。

姉さん、ああ、姉さんっ……御免、なさい、私が悪いのです。私が莫迦なのです。私が莫迦だから、姉さんに心配をかけました。酷い事を、言いました。……ずうっと、ずうっと姉さんをないがしろに、してきました。私は、けれど、そんなつもりではなかったのです。私が姉さんを厭がる筈がありません……姉さんを置いて居なくなる筈がありません……

だのに、私は何て、何て莫迦な事をしていたのだろう……姉さん、貴女に非はありません。私が悪いのです。御免なさい、御免なさい姉さん……私こそ、姉さんに厭がられたろうと思いました。姉さんに愛想を尽かされたろうと思いました。けれど、姉さんは、私を待っていてくれたんですね。有難う、本当に有難う、姉さん……ただいま、姉さんっ……

私は、姉を強く抱きしめた。姉の温かさは、私の心を静かに和ませ、優しく包み込んでくれるようだった。だから、私も姉にそうしてあげたかった。莫迦でどう仕様も無い私だけれど、少しでも姉に、この思いが伝われば良いと思い、強く抱きしめて、熱い涙を零した。

## 豊かさと稔りの象徴の場合 其乃三（前書き）

※東方Projectの二次創作物です。嫌いな方はごめんなさい。  
※Firefox利用者の方は「XHTML ルビサポート」が便利です。

<https://addons.mozilla.jp/firefox/details/1935>

## 豊かさと稔りの象徴の場合 其乃三

収穫祭を数日後に控えた頃になっても、私達は変わらず幻想郷中を巡っていた。特に今季は少々時間を無駄に——いや、私には決して無駄な時間ではなかったように思う。ともあれ、少々時間を食ってしまったのはいたので、その分を取り戻すべく、姉と共に幻想郷を巡る日々を過ごした。

私を見るべき領分は、ほぼ全て順調であった。

何も本当のお化け南瓜や本当のお化け茄なすびをこしらえようというわけではないので、人間の里での稔りを十分に与える以外は、野山の動物や妖怪共が生きて行ける程度に植物を太らせてやれば良い。それも例季通り植物が健康なまま、可能な範囲で手助けをするだけなので、太らせる具合もたかが知れている。

それに私が一番忙しいのは夏場の成長の盛りなので、実は今の時期にできる事は、方々を見回って稔りの芳しくない子達を励まして元気付ける程度である。だから順調というより、する事は殆ど無かった。

対して姉の見るべき領分は、まさに今が旬であった。

まだ深緑に生い茂る木々に、秋が来た事を伝えてやらねばならない。一番大きく、一番広い妖怪の山は、先達での訪問で済んでおり、今では燃え立つような茜色に染まっていた。そうしてそこから、秋はじわじわと伝播して、魔法の森や霧の湖には、紅葉を始めた木もまばらにあった。けれどそれでは伝わり方が遅いので、姉は木々の一本一本、草花の一群一群に秋が来た事を伝えるのである。

姉は日が沈むまでこれを繰り返し、一日の終わる頃には精も根も尽き果てたように疲弊して、私の肩につかまりながら、ふらふらと里の祠へ帰るのが最近の常であった。

私は姉を手伝えないのを齒痒く感じた。けれど姉は、私がそばに居るだけで嬉しそうな顔をした。姉は私の前で、決して笑顔を絶やさなかった。だから私も同じように、姉に笑顔をして見せた。冬が訪れるまでに、この幻想郷へ確りと秋を迎え入れなければならぬ。それにはまだ道のりは長いけれど、姉はきつとやり遂げるのだ、と私は信じた。そうして私も、手伝える事は幾らでも手伝うつもりで居た。

そうして収穫祭当日になった。収穫祭は例季通り、たつみがた異方の御社で執り行なわれるようだった。朝も早くから、里の中心街はざわざわと騒がしくしており、御社の方からは太鼓の音が威勢良く聞こえてきた。そうした音は私のお腹に、ずしんずしんと響いたけれど、厭な気持ちなどはせず、むしろ血のたぎるような、心の燃え上がるような興奮を呼び起こした。

少し前までは、何ともじめじめした気分でこの太鼓を聞いていたような気がする。何のかのと難癖付けて、収穫祭を厭がっていたような気もする。けれどやはり私は、根本的に祭というものが好きなのだった。この幻想郷でさえ、祭のなかに確固として在る、日常の中の非日常とした雰囲気が好きなのに違いなかった。そして私はやはり、姉にも収穫祭へ参加して欲しいと強く願っていた。

心躍る雰囲気にも我慢し切れず、私は朝日の昇り始めた頃に祠の外へ出て、手慰みに準備体操のような事を始めた。別にそんな事をする必要はないのだけれど、そうしないと居られないのであった。

程なくして姉が起きたので、私は姉に、今日の収穫祭に参加して欲しい旨を述べた。少なからず私は期待を籠めて、姉が肯定するのを想像し、いつかの黒白の魔法使いみたく、おねだりしたのである。

けれど姉は寂しさをたたえた笑顔をして、首を横に振った。私は風船の気が抜けたように、先までの元気を萎ませてしまった。けれど笑顔は絶やさず、姉に向かって、仕方無いね、と答えた。

私は姉の反応を、半分は裏切られたように感じ、もう半分は恐らくそうだろうと予測していた。結局あれから姉に事情を聞いてはいなかったけれど、やはり姉は何か理由があって、収穫祭に参加しないのだろう。それは姉の残念そうな表情から察せられる通り、参加したくないのではなく、参加できない事情なのだろうと思った。私にはそれがまだ何かは解らない。けれどそれは、きっと私の思う通り、本当に仕方無い事情なのだ。

その日私と姉は、日の出ているうちは幻想郷を巡り、夕刻から別行動を取った。

日の出ているうちに、私達は魔法の森と霧の湖までを巡り終え、博麗神社のある山の一部までを秋色に染めた。魔法の森は思った以上に土地が広く、秋を伝えるのに数日を要する難敵であった。けれども今日ようやく一面秋色に染まり、私達は達成感を以て今日の仕事を終えた。

私達は互いに喜び合ったが、それでも幻想郷は魔法の森より午の<sup>うま</sup>方角が、まだ全くの手付かずで残っていた。秋の日は短い。冬も少しづつではあるが、着実に近付いて来ている。私達にはまだ、ゆっくりと休む暇など無いのが事実であった。

夕刻には、私が収穫祭に呼ばれていたので、人間の里へ行かなければならなかった。私はあれから、収穫祭への参加態度も改めることにしていた。収穫祭への参加もまた、秋神の大事な仕事である。だから私は、気を引き締めてこれに参加しなければならぬのだ。今日の私はまだ、ゆっくりと休む時間など無いのである。

これから私は里へ赴き、里の人間達を正しい方向へ導いてやらね

ばならない。そうして芋料理を食い尽く……作物の出来栄えを誉めてやらねばならない。芋焼酎を飲まなければやっていられな……里の、作物加工技術の向上を讃えてやらねばならない。

「穰子、これで涎をお拭きなさいな。疲れているのかしら」

慌てて口元を手で拭い、ごくりと唾を飲み下した。姉はとても微笑ましいものを見たような顔をして、にこにこしていた。

ふらふらの姉を祠へ連れ帰ってから、私は巽方の御社へ向かった。姉は私を祠の外で見送った後、程なくして祠に宿ってしまったようだった。姉は秋にこそ、その神徳を発揮する。だからあるいは、ここ連日の仕事に体にくいているのかも知れない。ならば確かに、休めるうちに休むのに越した事は無い。私は姉の容態を心配した。けれど、いつも一晩休めば優しい笑顔で私に微笑んでくれるので、明日になればきっと大丈夫だろう、と自分に言い聞かせた。

そうして今日は、里の人間にお願いして、姉の好きな芋焼酎や、美味しいご馳走を幾らか分けて貰おうと思った。私達は存在するために食物を摂りはしないが、それでも旨いものは旨いと感じる。それで姉が元気になれば私も嬉しいし、里の人間達のためにもなる。姉はきつと、さも旨そうな顔をして飲んだり食ったりするのだろう。そうしてまた、頓珍漢な美食批評をするのだ。私はうっとりとした姉の表情を目に浮かべて、少しばかり楽しい気分になった。

私は人間の里を通って御社へ向かうことにした。人間の里はすっかり秋めいていた。そちこちに生える庭木は見事な茜色をして、ちらちらと舞い散る紅葉が、夕日の朱と良く馴染んだ。石造りの薨いらかの屋敷や茅葺きの民家、屋根石を据えた板葺きの長屋の、温かみのある土色をした棟々が、夕日を浴びて懐かしい色をした。そうして落

ちる影の向こうには、里の人間の生活があふれていた。

大通りは長く、どこまでも黄土の道が伸びて、連綿と続く里の歴史を編み出すようだった。そちらから、こちらから、浴衣掛けの里の人間が出入りし、行き交った。私の脇を抜けて、子供が三人ばかり、風車を持って駆けていく。その道の続く向こうに、私達を祀る御社がある筈だ。

収穫祭では御社の周りに様々な露天が出るけれど、里の中心街にはあまり露天は出ていなかった。ちらほらと出店しているのは金魚屋であったり、時期外れの風鈴屋であったり。そちらの軒では、沢山の風車がくるくると回り、秋の風を楽しんでいるようだった。

ちらり、ちらりと、紅葉は絶えず舞った。そうしてゆっくりと沈み行く夕日を背に、私は長く伸びる自分の影法師、里の人間の影法師、民家の影のモノクロオムと、夕日の照らす黄土の道、温かみのある屋根、茜色に染まる庭木や紅葉のセピア、そして金魚屋、風鈴屋、風車屋の水彩から成る風景を歩いた。ひたり、ひたりと歩く度、景色はゆっくりと、懐古色に沈むようだった。

私は、秋を歩いているのだと感じた。秋は、いつでも変わらず、懐かしい色をしているのだ。誰の心にもある懐かしい情景を、惜しみなく映し出してくれるのだ。だから秋は温もりがあり、優しさがあるのだ。少しの寂しさ、終わりある哀しさもまたあるけれど、それでも秋は懐かしく、人間の、動物の、生きとし生ける者達の心の糧となるのだと思った。

ひたり、ひたりと歩きながら、私は今ある秋を懐かしんだ。そうして秋の温もりと優しさを、肌で感じた。それは確かに、私の姉なのであった。

姉はだから、収穫祭に参加しないのではなからうか。姉は誰の心にも居るから、敢えて収穫祭に顔を出さないのではあるまいか。そうしてそれは、里の人間にも解っていて、姉の意向を汲み取ってい



るのではないか。

実は姉も里の人間も、私などより、もっと心を通じ合わせているのではないだろうか。心のずっと奥底で、秋と人間との根源の所で、深く深く結ばれているのではないだろうか……私は感傷的な気分になり、胸の内ではじんわりと、そう思った。そうならば少しばかり、姉にも人間にも嫉妬を感じてしまう。けれど心から、祝福したいようにも思う。私は何だか切ないような、こそばゆいような心持ちがして、少し足早に御社へと向かった。

収穫祭は盛況であった。民家を抜けて暫く続く参道沿いに、幾つもの露天が敷かれていた。玩具売りだの矢場、魚釣りなどは子供の小遣い程度で楽しめる程安く、芋屋だの饅頭屋といった食物を扱う屋台は殆ど只同然で振る舞われていた。それだけでも私は、里の人間達が本当に秋の収穫を楽しみにして、皆で豊作を祝っているのだと感じられた。とても嬉しく、とても誇らしい事だった。

私が参道を歩くうちに、里の人間から幾度となく声をかけられた。皆、嬉しそうな顔をしていた。皆、今季の豊作に誇らしげな顔をしていた。今季の冬も、皆飢える事なく過ごせる事に、安心した顔をしていた。私はそうした人間達の顔を見るだけで、こんな自分でも誇れるような気がした。人間達のために、来季も豊作を授けたいと思った。そしてやはり、今私の隣に姉が居たなら、どんなに良かったろうと考えた。

露天の前を通るたび、私は里の人間から店の自慢の逸品を捧げられた。よく来た穰子ちゃん、まあこれ食ってくれや。今季もお出でなすったね、どうだいこの味。そうら来た来た、おい嬢、穰子ちゃんに特製のアレ出してやんな。やや、これあ穰子ちゃん、今季はちよっと工夫したんだがね、どうだ美味しいかい。

里の人間の作った食物は、どれも絶品であった。私はそれらを気

高く、厳かに食い尽くして謝礼を述べ、里の人間を労った。決して子供のようにエへへ美味しいなどと口走らず、さながら山の神々のように、靈験あらたかに神勅を授けたのである。そうしてこれ良いな、あれ良い……特別よく出来たものを、姉に持って帰ろうと思いい、後で少しばかり包んでもらう事にした。

参道を暫く歩くと道は二股に分かれる。そのまま進めば山道を抜けて博麗神社に至り、右へ折れて少しばかり行けば私達の祀られる御社である。岐路には小さな石碑があり、道祖神が祀られている。そこも今宵は多くの露天が出ており、真昼の里の市場のように賑わっていた。

私が御社へ着いた頃には、多くの人間がへべれけで、宴も酺たけなわであった。それでも里の人間は私が来たのを察して、よく来た穰子ちゃんまあ飲めほれほれ、と私を車座に呼び込んで、湯呑みにどくどくと芋焼酎を注いで捧げた。これも私の神徳の賜物だろう。何故かやたらと子供達が寄ってたかるのも、同じ事である。子は国の宝であると言うから、それもこれもまた、私の神徳によるものである。少し向こうを見ると、寺子屋の教師がほっと一息ついていた。

「よう、子供に懷かれていますじゃあないか」

ふと見上げると、いつかの白黒の魔法使いが居た。これまでの収穫祭で、私はついぞ彼女を見た事が無かったのを思い出した。聞けば彼女は、派手で楽しいのは好きであるけれど、ここまで賑やかなのはあまり好きではないようだった。彼女は手に持ったぐい呑みを一息に空け、今日は面白いものが見られるから来たのだ、と告げた。

暫くすると車座になった宴席に、二人の巫女がやって来て、神楽を披露するようであった。確かにそれは、私も見た事の無いもので

あったが、特に面白いという気はしなかった。彼女が言うには、博麗の巫女と守矢の巫女なのだそうである。神楽自体はさして珍しくないものの、故あって信仰について考えを改めた博麗の巫女が、守矢の巫女の勧めで、山の神の一員である私達のために神楽を披露しに来たのだという。

いつの間に私達は山の神の一員にされたのだろう。多分私も彼女達も、その守矢の神々にそそのかされたのだろう。守矢の少女は、正確には現人神であったように記憶しているが、ご苦労な事である。私としては、こうして貰える事に悪い気はしなかった。それよりも、近頃の外来の神のしたたかさに、私は感心した。恐らくはそうして、間接的に私達の信仰をも数に入れるのに違いない。といって私達の損にもならないので、巧いやり口である。事前に断りを入れないところが少々気に食わなかったが、それが彼の神々の挨拶のようなもの、なのかも知れない。姉なら、面白いわね、と一言で済ませてしまえそうだと。

「アハハハハハ。いや愉快愉快。しかし普段練習もしないのに、どうしてああも息を合わせられるものかな。きつと蛸踊りみたくなると思っていたんだが、残念だぜ」

そう言う彼女が私の隣に座り、私にぐい呑みを向けた。いささか不遜な態度ではあったが、彼女には貸しがあったので、隣の若者に断りを入れて焼酎を貰い、一杯を注いでやった。そうして私と彼女は杯を差し上げ、共にぐいと一息で干した。

それから彼女は、私に先日の事を尋ねた。それはあれからの私の行動ではなく、里の人間への誤解が解けたかという事であった。私は、まだ誤解を解いていないと答えた。けれど、今日の最後に里の人間へそれを伝えようと思っている事は、言わずにおいた。

彼女は興味無さ気に、ふうんと呟き、手酌でぐい呑みに酒を満た

した。そうして私の湯呑みにもまた一杯、酒を注いだ。私と彼女は暫し黙り、神楽舞を見ていた。何という神楽なのかは判らないが、随分と前衛的で、見た事もない激しい動きをしていた。

ちらり、ちらりと紅葉が舞った。彼女は私に、姉がどうしているのかを尋ねた。紅葉を見て思い出したのだろう。残念な事ではあるが、まだ幻想郷の半分がところ秋を迎えていないので、連日の疲れで今宵も休むのだ、と私は答えて――はたと気付いた。

どうした事だろう。この里に、秋が来ている。今日まで巡ったのは、魔法の森あたりまでではなかったか。それよりも午の方は、まだ手付かずではなかったか。勿論、この人間の里も。

ざざという音を立てて、一陣の風が吹き抜けた。そうしてそれを切っ掛けに、楓が、銀杏が、山桜が、柏が、水榭が、椈が、樺が、――ありとあらゆる紅葉が、くるり、ひらりと踊り出る。

御社に、道祖神のある岐路に、参道に……どこまでも、どこまでも舞い踊る。時に激しく、時に厳かに。哀しさをたたえて、寂しさを秘めて。けれど曇らず、影を与えず。懐かしく、ただ懐かしく。

その不思議な神楽に、誰もが呆として息を潜めた。酒を交わして祝う里の大人も、夢中で料理を食う子供も、ゆったりと茶を啜る寺子屋の教師も、車座の中心に立つ巫女も現人神も、隣で酒をお酌する黒白の魔法使いも、そうして私も。辺りはただ静謐として、時折ほうと息づく音と、後はただ、さらさらと紅葉の舞う音ばかりが聞こえた。

天の川の穏やかな光に照らされて、ちらり、ちらりと紅葉が踊る。そうして紅葉の舞うたびに、博麗神社のある山が、ぽつり、ぽつり

と秋色に染まる。一雫、また一雫と山を染め、紅葉は嬉しそうに、  
楽しそうに、くるくる、くるくる舞い続ける。

そうして私達はただそれを、母を慕うような懐かしさで見ている。  
一刻程の出来事だったろうか、それとも刹那の出来事だったろうか。  
博麗神社のある山は、いつしか燃え立つような茜色をして、私達に  
秋を告げた。

「……凄い」

黒白の魔法使いの一言が、波紋のように広がった。小さな波紋は  
大きく広がり、返り、重なりして、皆の息を吹き返した。呟きは囁  
きに、囁きは感嘆に、感嘆は歓声に、歓声は喝采に変わり、誰もが  
今の不思議な神楽を褒め称えた。御株を奪われた巫女と現人神は、  
いつの間にやら隅へ移動して苦い顔をしていたが、それでも何処か  
優しく、懐かしそうにしていた。

「何だ、何だよあれ、凄いで。あれはあんたの姉の仕業なのかい。  
おい人が悪いぜ、どうして黙っていたんだい。なあ、あんたの姉な  
のだろう」

黒白の魔法使いは、歓喜に満ちた顔をして、私の肩をしきりに揺  
すった。辺りを見れば、立ち上がり拍手をする人間も居た。肩を組  
み浮かれる人間も居た。きゃあきゃあとよく判らない声を上げて、  
興奮覚めやらぬ子供達も居た。

私はただ、涙を零していた。ころり、ころりと、温かい涙が頬を  
伝った。あれは間違いなく、姉の仕業なのだろう。姉は私に、言葉  
ではなくこうした形で、収穫祭へ参加できない理由を教えてくれた  
のだろう。恐らく姉は、これまでずっと、昼も夜も関係なく、幻

想郷へ秋を伝えに巡っていたのに違いない。だから毎日あんなに疲弊して……それでも、それでも健気に、私に笑顔を見せてくれて。私を大切に、想ってくれて……

「……ええ、ええ。私の、姉さんです。あれが、私の自慢の姉さんなのです」

涙ははらはらと、後から後から頬を伝った。けれどそれは温かで、心地良い涙であった。だから私は、黒白の魔法使いに笑って返した。私はうまく笑えただろうか。私は誇らしげに笑えただろうか。彼女はそうした私を見て、ただ満足そうに、私の肩を優しく叩いた。

私は今こそ、里の人間達に伝えなくてはいけない。人間達は姉の事を、解ってくれるだろうか。不安は無くも無い。けれど、だからこそ、私は今、人間達に伝えるべきなのだと思うのだ。そうして私は涙を拭い、満面の笑みをたたえて、声を張り上げて里の人間達に呼びかけた。

秋風の名残りに乗って、今また一葉の楓が舞った。そうして楓はひらひらと私の肩に舞い降りて、暫しの休息を得るのだった。

**豊かさと稔りの象徴の場合 其乃三（後書き）**

《其来 それから 豊かさと稔りの象徴の場合 完》

## 寂しさと終焉の象徴の場合 其乃一（前書き）

※東方Projectの二次創作物です。嫌いな方はごめんなさい。  
※FireFox利用者の方は「XHTML ルビサポート」が便利です。

<https://addons.mozilla.jp/firefox/details/1935>



## 寂しさと終焉の象徴の場合 其乃一

秋も深まった頃の事である。妖怪の山の騒動で疲れていた私は、家で惰眠を貪っていた。夕暮れになってようやく眼を覚ますと、玄関に一通の手紙が届いていた。

手紙は古風な和紙で、ほんのりと赤みがかった。手触りはざらざらとして心地良く、手作りのようであった。けれどそれは、いつもやり取りする手紙にしては随分とかさが張っており、拾い上げた指先にずしりと響いた。手紙は十数枚ほどの分量があり、二つに曲げて麻紐のようなもので括られていた。結び目には、染みもむらもなく茜に染まった楓が一葉差し込まれていた。

それは私のよく知る秋神の手に成るものであった。私はこれまでも、彼女から何通か便りを受け取っていた。けれども私はこうしたものに対し筆不精であった。これまでは、いずれも短めの葉書であったから、恐らくは彼女も返信を期待せず、好きで送っているのだろうと考えていた。態の良い言い訳である。私はいつも書こう書こうと思いつながら、まだ一通しか彼女に返信した事が無かった。

さては返事の催促に、こんな分量の手紙を書いたのかしらん、と私は思った。けれどそんな下らない理由で差し出す分量でない事は、すぐに解った。とすれば、尋常でない何事かが起きたのに違い無かろう。そしてもしそうなら、何事か手助けをしてやろう、という気持ち私が私にはあった。これまでの手紙の返礼ではないが、それくらいには私も彼女のことを好いていたのである。

紐を解くと、懐かしいような木立の香りが鼻をくすぐった。和紙には数枚毎、紅葉した木の葉が漉き込まれて、控え目な彩りを与えた。そうしてそこに細く丁寧な字で、何行もの文章が刻まれていた。私は早速、その手紙を読むことにした。



拝啓――

ご無沙汰しておりましたところへ、昨日は思わず再会できた事を大変嬉しく思いました。あなたもお変わり無く、何よりです。あの時はあなたを人の子と侮り、大変失礼を致しました。あなたはあれから、山へ向かったのでしょうか。

私は弾幕勝負の強さというものが、よく分かりません。あなたが無事である事は、紅葉の噂で聞き及んでおりましたけれど、お怪我はありませんでしょうか。またあなたは、穰子にも勝負を持ちかけたようですけれど、穰子の弾幕勝負は強かったでしょうか。もしそうであれば、私は少しだけ、安心できるかも知れません。あの子がもし独りでいたとしても、弾幕勝負が強ければ、きっとこの郷では大事に至ることも無いでしょう。ですから少しだけ、安心できるのです。

あの後、私達が里の祠に戻ると、沢山の茸が供えられておりました。お賽銭もありました。一目見て、あなたからの贈り物だという事が分かりました。とても懐かしい贈り物をありがとうございます。あの茸は、確かあなたと初めて出会った日に、おわびのしるしに頂いたものと同じでした。あなたもその時の事を覚えていて下さったのだと知り、とても嬉しく思いました。

昨季の夏の終わり頃でしたでしょうか。私が山を下る途中、木々を分けて飛んで来たあなたに、ぶつかりそうになったのでしたね。あれは、あなたばかりが良くないではありません、私の不注意もありました。

私はこの郷に秋をお迎えするため、夏の終わり頃になると、山の準備を手始めに各地を巡るのです。準備は手早く済ませなければなりませんので、あの日一日で山を周ったのです。ですから少々疲れて、ふらふらと山を下りたのが不注意だったのです。今まで申しそびれておりました事、申し訳無く思います。

ですが、私はあの時あなたに出会う事ができて、今は良い巡り合わせに感じております。あなたは どう思っ て下さるのでしょうか。もし私と同じ気持ちなら、それはとても嬉しい事です。

思い起こしてみますと、あなたはもうその頃から、とても強い方だったのですね。あの時私は、枯葉を吹き散らしてやって来るあなたを、思わず「困った木枯らし」などと評しましたけれど、今考えてもやはり、そのように思われます。けれどお気を悪くしないで下さいまし。木枯らしは私にとって、決して悪いものではないのですから。

木枯らしは「木嵐」が元だといわれます。木枯らしが吹くことで、木々は重たい木の葉をぬぎ捨てて、身も心も軽くするのです。そうして彼らは、忙しく成長する季節から、安らかな季節へ移ったのを知るので。光を受けて空気をつくる、あくせくとした日々から放たれて、枯葉と共に肩の荷を下ろし、蓄えた養分でしばしの休息を得るのです。そうして春までゆっくりと過ごせるのですから、こんなに嬉しい事はありません。

そうしてそれは、私も同じなのです。秋神である私も、秋には一生懸命おつとめします。けれどそれは、ゆっくりと冬を過ごすために、そうするのです。そうして木枯らしの吹く頃に秋は終わりを迎えて、私もようやくのんびりと過ごせるのだ、と喜ぶのです。少しばかり、不謹慎でしょうか。

ですからあなたは私にとって、力強さを感じる嵐のようで、安心

を与える季節の訪れのように、だから「困った木枯らし」——「困った」というのは、やはりそうしたまだ早い時期に出会ったのですから、私はとても困ってしまっ——これでは言い訳になりませんね。ご免下さいましね。

あなたへの手紙は、どうも私の地が出てしまうようです。私はときおり、穰子をうらやましく思う事があるのです。だから強いあなたに、私は少し甘えたくなくなってしまうのかも知れません。

そうして出会った時、あなたは私に大変親切にして下さいました。尻もちをついた私を助け起こして、私の服に付いた木の葉を払って、痛いところは無いか、なんて心配して下さいました。それまで私は穰子の姉であり、里の人々の信仰する神であり、この郷の秋でしたから、あなたのように接して下さいる方がいることを存じませんでした。だから私は嬉しくって、その時の事をよく覚えていのです。それからあなたは私に、たくさん美味しそうな茸を分けて下さって、にっこり笑って頭をなでて下さいました。それが私には嬉しくって、茸の種類までよく覚えていのです。

昨日の茸も、とても美味しかったです。茸はお鍋にして茸汁にして食べました。茸汁は穰子の特製です。茸の旨味をじっくりと引き出して、ゆっくりと煮込んで、濃く煮詰まったとろとろの汁をからめて食べる、穰子の

（以下数行、点々とした涙の滲みと訂正跡）

けれどあなたも悪いお方です。茸の中には毒茸も入っていたではありませんか。紅天狗茸は、<sup>べにてんぐだけ</sup>うま味に似た成分が多い事は私も存じております。けれどそれは、ただ似ているだけではありませんか。

その本当の成分は、人の感情を狂わせてしまうものではありませんか。あなたほど茸に精通していらっしゃれば、ご承知のはずではありませんか。

健康な方には、ごく少量であれば大変美味しいものかも知れません。そうしてこれを変好む方もいらっしゃることは存じております。けれどそうでない者には、ごく少量でも毒成分に惑わされてしまう事があるのです。合わない者には、たとい健康であっても毒される事があるのです。

私達姉妹は、人々から神と呼ばれ信仰されております。けれど人の姿を得た私達というのは、彼らが想像する私達の姿なのです。それはつまり、彼らと同じように考え、悩む姿です。彼らと同じように食べ、休む姿です。人の姿の私達は、人であるのと同義なのです。ですから人々にとつての薬は、私達にも薬となります。彼らにとつての毒は、私達にも毒なのです。

穰子は最近、何事か悩みを抱えているようでした。たいそう疲れた顔をして、心を無くしておりました。私は鈍感でしたから、そうした穰子の疲れをまるで知らずにいました。私は情け無い姉です。けれどあなたも悪いお方です。穰子はきっと、それが毒茸だなんて知らないでいたのです。だから私の制止にも、どれが毒茸なのかきつと分からなかったのです。穰子は稔りを司る力があります。けれど菌類である茸は私の領分ですから、きつと穰子は知らなかったに違いありません。

そうして可哀想に、穰子は毒茸を食べて心を狂わせてしまったのです。私が厭になって出て行ってしまったのです。私は今、悲しくてなりません。苦しくてなりません。穰子に何かあったら、私は

（以下数行、点々とした涙の滲みと訂正跡）

——大変失礼な文章となりました事をお許し下さい。私も少し感情的になっているのです。あるいはこれも、紅天狗茸の影響なのかも知れません。どうかお許し下さい。

少しばかり夜風に当たり、気持ちを落ち着かせる事ができました。そうしてまた、やはり私のせいなのだ、という結論に至りました。ただ、それでもあなたには私達の現状を理解して頂きたく、これまでの文章も同封いたします。支離滅裂で不愉快きわまりないかも知れません。ですが今の私は、それを判断できる精神状態にまで回復しておりません。私も少しばかり、茸汁を頂いたのです。

ですから在るがままを書き記すことしか、今の私にはできません。あなたにはご迷惑をおかけします。無礼ではございますが、どうか承知おき下さいまし。

あなたは魔法店を営んでいらっしゃるようですが、里の方からはいわゆる「何でも屋」なのだと伺いました。もしそうであれば、私はあなたに是非とも依頼したい旨がございます。どうか私の依頼を請けては頂けませんでしょうか。

私の代わりに、穰子を助けてやっては頂けませんでしょうか。そうして、もしできますれば穰子を安全な場所へ導いてやっては頂けませんでしょうか。

（以下数行、訂正跡。端々に震えた字の一部が見える）

私は穰子に厭がられてしまったのだと思います。そうして恐らく穰子は、私の許へ帰るのを厭がると思うのです。ですから私ではき

っと駄目なのです。どうかあの子がこれからも無事に存在してくれるよう、力になって頂けませんかでしょうか。



喉の渴きを覚えた私は、緑茶を淹れる事にした。秋の肌寒さと、また少しばかり面倒なのもあり、机に八卦炉と五徳を置いて薬缶を弱火に掛けた。

八卦炉から漏れる薄青い光が、部屋をちろちろと揺らめかせた。乱雑に置かれた書物や魔法具の影が、大きくなり、小さくなるのを見て、私はようやく日が暮れた事を知った。

席を立ち、天井に吊るされたラムプに火を灯して十分な明かりを得ると、伸び縮みする影はなりを潜めた。代わりに部屋の惨状が浮き彫りになったので、私は思わず顔をしかめた。

日中は何でもなく見えるのに、こうして改めて照らし出すと、まるで物置小屋である。これではいつか間違いが起きて火事にでもなりかねない。少し掃除でもしようか、という考えが私の頭をよぎった。

いずれも気の迷いである。僅かばかりの罪悪感が、この手紙から私の目を背けさせるのだ。

とはいえ茸を食ったのは彼女達の勝手だから、私の所為ばかりとも……いや、そういう事ではない。直接でないにせよ、どうやら私はこんなに私を好いてくれる彼女を、悲しませたらしい。それが少しばかり残念なのだ。

私は首を振り、席に着いて再び手紙を捲った。



依頼をするにあたり、少しばかり私達の事をお伝えしなくてはなりません。手紙として長くなる事、大変恐縮に存じますがどうぞお許し下さい。私の依頼を受けて下さるかどうかも、それからのあなたのお気持ち次第で結構です。

私達姉妹は古くから神として人々の信仰を受けてきました。年月で言えば、多分私達は山に越してきた戦の神よりもお古いでしょう。

穰子は豊穰を司る神として、私は紅葉を司る神として、時を同じくして人々に祀られました。対象とする信仰の異なる私達は、互いに独立した神でしたけれど、二柱で一つの神でした。

穰子は豊穰を司りますが、その神徳だけでは人々を満たす事はできません。実の若い作物は、それだけでは人々が生きていくための栄養に足らず、みずみずしいばかりで、すぐ腐れます。また、若い実の成分は時に毒ともなります。ですから私は紅葉を司る神として、実を熟れさせることで人々の食を補い、穰子の支えになります。

私は紅葉を司りますが、その神徳だけでは人々を潤す事はできません。散りゆく紅葉の寂しさばかりを見せ、朽ち果てる病葉の終焉わくらばばかりを晒して、どうして人の心を潤す事などできません。穰子が豊穰を司る神として、紅葉が次代の命を育み、そうして命は紡がれるのだという事を、その神徳をもって里の人々に伝えてくれるからこそ、人々は紅葉に懐かしさを覚えて心を潤すのです。

ですから私達は、秋というきずなで結ばれた姉妹のようなものなのです。季を同じくして神となった事は、してみると必然でありましょう。私達は畏くも麗しき稲田姫様のご加護を得た、姉妹神なのです。



私と穰子は互いを認め合っております。私は穰子の豊穣を称え、穰子は私の紅葉を称えます。時に私は私の紅葉を誇り、穰子は彼女の豊穣を誇ります。そうしてけんかなぞをしても、やはり私達は認め合っていましたから、すぐに仲良くします。

私達は、人々から異なる形で信仰を受けております。私は紅葉を司りますから、景色を通じて心ある者から愛され、野山に見られる自然に宿るものでした。穰子は豊穣を司りますから、作物を通じて人々から愛され、田畑に見られる人為に宿るものでした。ですから私達の護るべきものもまた、互いに異なります。私は特にこの郷全ての自然を愛しますが、穰子は特に里の人々を愛するようです。

思えばそうした考え方の違いが、今こうして私達を引き裂いてしまふ原因となったのかも知れません。私は私の愛するものを手放す事はできません。もちろん穰子も大切な妹ですから、手放したくはありません。

けれど私は浅はかにも、穰子の心情にまで思い至りませんでした。私が私の愛するものを手放す事ができないように、穰子もまた同じであることに全く気付かずになっていたのです。

ですから私は、穰子が心を狂わせてしまったのが私のせいなのだと考えるのです。穰子の心を分かってやれなかった鈍感な私に、きっと穰子は厭気がさしてしまったのです。私はこれまでずっと穰子を苦しめてきたのに違いありません。私の身勝手な行動が、どれほど穰子を傷付けたことでしょう。よもやあなたに非などあろう筈が無いのです。全く私の言いがかりなのです。全ては、私が悪いのですから。

互いの信仰を異とする私達は、それでも近頃までは里の人々のた

めだけに尽くしました。私達が里に祀られるようになった頃の事ですから、この郷が博麗大結界で隔離されるよりも少しばかり以前の事でしょうか。少しといっても、私達とあなたの感覚とでは、隔たりがあるかも知れません。とにかくその頃は、耕作の技術といっても稚拙なものでしたから、実際人々は作物の成果に命を左右されていたのです。

私達は、里の人々のために惜しみなく神徳を振るいました。そうして人々もまた、私達をあつく信仰しました。それは自然の循環であるかのように、私達と里の人々をつなぐのでした。けれど、それでも力の及ばない事も多々あり、私達は余裕の無い日々を過ごしました。

豊作の頃、私達はとても安らかな冬を過ごしました。とはいえ、今と比べればとても豊作とは呼べないでしょう。それでも人々は喜び、私達を崇めました。収穫祭を行なうほどの余裕はありませんでしたが、それでも新嘗祭にいなめさいなどがありました。慎ましく、けれど厳かなもので、大変信仰のあついものでしたので、私達は安らかでいられたのです。

凶作の頃、私達はまるで逆でした。人々の多くは飢えに苦しみ、それがための死者も少なくありませんでした。私達は信仰を減らしましたが、それでも里の人々からは、決して信仰心が絶える事はありませんでした。そうした冬に私達は、里の人々に申し訳なくて涙を流し、無力な自分達がぐやしくて、いじめ暮らしたのです。

そうして過ごすうちに、里の人々も努力を重ねて、いつしか豊作が続くようになりました。備蓄にも余裕ができて、その頃から収穫祭が行なわれるようになりました。やはり今と比べては、それはささやかなものでしたが、感慨深いものでした。そうして私達も、いつも安心して冬を過ごせるようになったのです。

ですからそれは、心の余裕から来る私の我侭であったのに違いあ

りません。けれど私には、決して手放す事のできないものでしたから、たとい我侂だと言われたにせよ、きっと私は同じ事をしたでしょう。

私はある秋の日に、ふと自分の行ないを省みることがありました。きっかけは、取るに足らない事であったと思います。たまたま見上げた空の向こうに、まだ青々とした山があったのだとか。鼻先をかすめた木の葉が、かざりと音を立てたのだとか。けれど私は、それが私の心を打ち震わすような事に感じたのです。

私は里の人々の信仰する秋神である前に、紅葉を司る神である事を思い出しました。私には、私のための信仰があったのです。もちろんそれは私の礎いしづえでしたから、決して忘れていた訳ではありません。ただそれまでは、そうした事を考えないようにして、また考える余裕も無いまま、穰子と里の人々に協力していたのです。

けれど、だからこそその思いは私の胸に深く刺さったのです。穰子のための信仰を分けて貰っている現状は、私にとって望ましいものだろうか。そう思うと私は、うんうんと頭を抱えてしまいそうになり、居ても立ってもいられなくなりました。

しばらくの間、私はその疑問に悩みました。そうしてついに、その秋の収穫祭を辞して、ひとり祠で途方に暮れました。収穫祭で信仰されるのは豊穰の神である穰子でしたから、私が参加するべきではないように思ったのです。

穰子はその日の夜遅くに帰ってきました。ずいぶんとお酒を飲んだようで、真っ赤な顔をしていました。そうして私の肩をつかんで力いっぱい揺すりながら、私の参加しなかったのを責めました。私は少しむっとしましたが、話を聞いてみると、穰子も里の人々も、ずいぶんと私を心配して下さったのだそうです。そうして穰子もや

けを起こして、里の人々になぐさめられるまま、お芋を七つと、焼酎を一升空けたのだそうです——今にして思えば、食いしん坊のずいぶんな言い訳のようだけれども。

その時私は少し、穰子や里の人々にすまないように感じたのでした。ですから私は穰子に一言謝り、その季の収穫祭のことを聞きました。穰子は私に、里の収穫が上々だったこと、人々がとても満足そうだったこと、近頃できた共同の備蓄庫や、食物の保管技術、加工技術がどうかという話をしました。ほろ酔いのせいか、少しばかり口調の怪しいところもありましたが、昔と違い里も大変発展したことが分かり、私もひと安心したのです。そうして後はお芋の美味しかったことや、芋焼酎のできの良かったことをしきりに言っていたようでしたが、私はそれを上の空で聞いていました。

私はもう、里の心配は無くなったのだと思いました。ですから、思い切って穰子に、私の悩みを打ち明けることにしました。私はまた私の信仰のために、野山に紅葉をもたらし、この郷に秋を迎え入れる神に戻りたいことを言いました。

それまでは私も里の人々のために神徳を振るっておりましたから、野山の紅葉は自然のままにしておいたのです。けれどそれでは、いつ秋が来たのか分からないでいる子達も居たのです。冬に備える準備が遅れてしまい、困ってしまう子達も居たのです。

そう言うとき穰子は、あっさりと私を認めてくれました。私がそう思うのであれば、正しくそうするべきだと言ってくれたのです。私はその言葉をしばらく呑み込めずにいきました。穰子が反対するようにも思いませんでしたが、そんなに簡単に認めてくれるとも思っていないませんでした。なにせ里の人々の豊穰は、私達姉妹がもたらすものと言っても過言ではありませんでしたから。

またしばらくして、穰子は私にこんな事を語ってくれました。それはとても優しい言葉で、私は強く心打たれたことを覚えています。

私は豊穰の神ですから、私にとって里の人間は、お腹を痛めて生んだ子供のようなものです。そうした事実はなくとも、きつとそうなのには違いありません。だから私は収穫祭で、人間達のほころぶような笑顔を見ると、とても嬉しいのです。

そんな我が子が困っているのを見たら、姉さんはどうしますか。きつと手を差しのべるでしょう。姉さんは私よりも優しいから、私の子にもそうしてくれたのでしょうか。

けれどもう、大丈夫。私はやはり里の人間が我が子のように思えますから、これからも手を差しのべていこうと思います。ですから姉さんも、姉さんが我が子のように思うものに、手を差しのべてあげて下さい。

私達は、この郷の秋姉妹なんですから。今度は私も、姉さんのお手伝いをしましょう。

そうして私の悩みは解決されました。私の頭のなかでぐるぐると渦巻いていたものは、栓を抜かれた桶の水のように流れていって、すっきりとしました。

私は穰子を強く抱きしめて、ありがとうを言いました。穰子はとても温かでした。しばらくそうして抱きしめていると、穰子はすやすやと寝息を立てました。

## 寂しさと終焉の象徴の場合 其乃二（前書き）

※東方Projectの二次創作物です。嫌いな方はごめんなさい。  
※Firefox利用者の方は「XHTML ルビサポート」が便利です。

<https://addons.mozilla.jp/firefox/details/1935>

## 寂しさと終焉の象徴の場合 其乃二

部屋の中はもう程良い暖かさになっていた。ランプの灯がちらちらと煩かったので、私は少し席を立ち、油を注いだ。油壺を何処へやったか忘れてしまい、少しばかりその辺をばたばたと引っ繰り返したので、部屋がまた少し散らかった。

席を立ったついでに、守矢の巫女から貰った土産の塩羊羹とやらを戸棚から出して食うことにした。羊羹に塩なぞ聞いた事もなかったが、大正の頃から外の世界で親しまれ始めたのだと聞いたので、成程幻想郷には無い外来の品なのだと知った。

少しばかり塩気のある羊羹は、緑茶に妙に馴染んだ。漬物みたいなものかと思ったが、確りと甘味も後に引くので、続けざまに二切れ程口に入れた。

何となく、塩羊羹はこの手紙を読むのによく合う味をしているな、と思った。



穰子は姉思いで人思いの、良い子です。食いしん坊なのが玉に瑕ですけれど、それもまた穰子の人々に対する愛情の表れなのだと思います。ですから、末永く人々と共にこの郷に在るべき神だ、と私は思います。決してひと時の心の迷いで、自分を見失ってはいけない子なのです。

そうして穰子の心を見失わせた私は、姉失格なのだと思います。けれども私もまた、私を見失うことはできません。私は私として、穰子は穰子として在り続けなければ、人々の助けとなることはでき

ないのです。

神は万能ではありません。間違いもするし、迷いもするものです。言い訳のように思われるかも知れませんが、神とは人の心の表れなのですから、いずれ不合理であいまいなものです。けれどそれが見失われた時、神は消えなければなりません。

私にはそれが恐ろしくなりません。けれども私には、どうしようもないのです。ですから私は、あなたに依頼をしたいと考えたのです。

お話を戻しましょう。私は穰子に悩みを打ち明けたあくる日から、この郷を巡ることにしました。それには穰子も付いて来てくれました。穰子はまだ少しばかり酔いの残った顔をして、私を労ってくれました。私はそれを、私の役目への心からの同意として受け取っておりました。ですから私は、穰子の顔にかすかな疑問が浮かんでいたのを全く気付かずにいきました。

どうやら、穰子は前夜の事を少しも記憶していなかったようなのです。確かにたいそう酔っていましたから、それは仕方の無いことだったのかも知れません。そして私も役目を果たすことに夢中で、それを気にも留めなかったのです。

あくる日も、またあくる日も、私は穰子をつれ立って幻想郷を巡りました。穰子は少しばかり手持ちぶさたにしていました。が、それでも野山の紅葉する景色を見て、とても喜んでくれました。

その季は結局、幻想郷を半分ほど巡ったところで冬が来ました。思えば幻想郷が博麗大結界で閉じる前まで、境界はあいまいでしたから、私は全ての地を巡ったことがなかったのです。私はこの郷がそれほど広いとは知らず、残念な思いで冬を過ごしました。

私は来季こそ、幻想郷を全て巡るつもりでいました。そうしてしっかりと秋をお迎えして、この郷を紅葉で満たしてあげたいと思いました。穰子は特に何も言いませんでした。穰子には少しばかり訳



知り顔をするくせがありましたから、もしかすると何も言えなかったのかも知れません。けれど私はまた、それを同意として受け取ったのです。

次の季から、私は紅葉の神としての役目に集中しました。秋を迎え入れるために夏頃から方々を巡り、木々の成長の具合や動物の生活の様子などを観察して、どうやって幻想郷に秋を呼ぶのが良いかを考えました。

秋を呼ぶといっても、私には木々を紅葉させ、実を熟れさせるくらいしかできません。けれどもそうして考えた結果、たったそれだけの事でさえ、わずか三月足らずの日々では幻想郷へ秋を迎え入れるのに時間が足りないことが分かったのです。

それからというものの、私は秋になると忙しくなりました。日の出ている時分は、穰子と一緒に幻想郷を巡ります。ときおり穰子は里へ行って、人々の作物の稔り具合を確認しますが、それに私は付いて行ったり、行かなかったりします。

夕暮れから夜までの間は、少し休憩します。ほとんどの場合、ぼうつとして過ごすか、居眠りをします。あなたに出会った後からは、お手紙を書くのも良い休憩となりました。そうして他には、里の人からのお供え物を穰子と一緒に頂いたりもします。

夜になると、私は穰子が眠ったのを見計らって外へ出ます。それからまた明け方近くまで、里の近辺を巡ります。三月で幻想郷中を巡るには、そうしなければ追い付かないのです。

私は、里の収穫祭への参加も辞退しました。この郷の人々はお祭り好きなようで、いつも明け方まで元気に飲んで食べて騒ぐものですから、私にはとても参加する時間がありませんでした。またそちらへは穰子が参加してくれましたから、私は気兼ねすることなく、役目を果たして良いのだと考えました。

そうして一季、また一季と過ぎ、私は収穫祭へ参加しないのがあたりまえのようになりました。穰子はやはり、その事について何も言いませんでした。けれど収穫祭のあくる日には、私に収穫祭のことを教えながら、楽しそうにほほえみました。

私は秋を呼ぶ役目を果たしながらその話を聞きました。もちろん私は、その話を聞いて里の近況を知りましたから、まじめに耳をかたむけて穰子に相づちを打ちました。そうして話が終わると、私は安心して役目に打ち込むことができました。

ですから私は、季を追うごとに穰子のほほえみにさした暗い影を、全く見逃がしていました。今だから分かるのですが、穰子はたびたび、悲しそうな目でほほえむのでした。

また穰子はときおり私を呼び、もしもじとして何も答えないこともありました。それも恐らくは、私が里の収穫祭へ参加しない事を問いたかったのかも知れません。

ある収穫祭の翌朝のことでした。私が目を覚ますと、穰子もいつの間にか戻っていたようで、祠で眠っていました。私は穰子を起こすのをよして、その日は一柱でこの郷を巡ろうと思いました。けれど出がけに、私は穰子の寝言を聞いたのです。

それはとても弱々しい声でした。いくら寝言とはいえ、あの気丈な穰子が語る声にしては、とても寂しく、とても悲しい声でした。そうしてそれは、私に訴えかける声なのでした。

穰子是一言、どうして来てくれないの、姉さん、と言いました。それを聞いて私は、胸にびしりとひびが入ったような心地になりました。ひび割れから落ちたかけらが、ころころと胸を転がって、ちくちくするようにはいました。私は少しの間何も考えられなくなりましたが、気付いた時にはいつものように、林を紅葉に染め、木々に秋の訪れを伝えて巡っていました。

（以下数行、訂正跡。端々に震えた字の一部が見える）

私は、この手紙であなたに嘘をつくところでした。「今だから分かる」「それも恐らくは」——とんでもありません。私はこの時に、もう穰子の心の内を了解していたのです。

そのうえで私は私を見失わないために、了解した穰子の心を、呑み込んだままいたのです。「神は万能ではありません」——そんな事、言い訳でしかありません。

私は、穰子よりも自分を選んだのです。

昨夜、穰子は私に収穫祭への参加を尋ねました。それまで穰子はそうした問い掛けをしませんでしたから、それが最後通牒に違いなかったのです。だのに私はいつもの事と思い、軽い気持ちで辞しました。穰子は、——

（以下数行、点々とした涙の滲みと訂正跡）



月明かりが森を照らしていた。窓越しに森は見渡せないが、それでも森はまだ青々としてのことだけは見て取れた。

瘴気漂うこの森でさえ、秋には紅葉を兆す。けれど今の森の木々は依然変わらず、重たく葉を付けていた。冷然とした森の毒気のか、すうすうと息を吐く木々は苦しそうに項垂れて見えた。

手紙のなかの彼女に、私は少しばかり苛立ちを覚えていた。ここまで書いておきながら、何故彼女がそうした結論に至ったのか、ちっとも解らなかった。依頼内容から、いや冒頭の妹の話からして矛盾に満ちている。そう私は思った。

けれどそれは、或いは容易に掘り返す事の出来ない、彼女の痛切な部分なのかも知れない。そう思うと私は、要所にある訂正跡を透かし見る事の出来ないのが、もどかしく感じた。

手紙はあと二枚ほどあるようであった。私は冷めた緑茶を飲み干して、再び手紙へと目を落とした。

一枚目には先程からの続きと思しき文章が記述されていた。



私は今日も、これから幻想郷を巡るつもりでいます。けれどそれは、穰子を探すためではありません。私は私のために、また私の愛する郷のために、秋を迎え入れるために巡ります。莫迦だとお笑い頂いても構いません。なぜ妹を探さないのかと怒られても構いません。私には、きつと——穰子と一緒にいる資格は、ないのです。

普段は神などと呼ばれる私達も、結局は人々と同じなのです。とくに私などは、こうした場合にどうすれば良いのか、まるで分からないのです。

こうした場合、人はどうするのでしょうか。神頼みをするものでしょうか。けれども私達は、自然に在り、人為に在って、人々の心に感得されるものです。ですからそれは、自省とも人頼みとも言えるのかも知れません。

そしてまた私達も、信仰する人々の念じる通りの私達も、そうするしか無いようです。人々の心から外れることのない私達は、やはり人と同じ行動しか取れないのです。

神などと呼ばれていても、私達はずいぶん儂く、弱いものです。

長々とした手紙となり、大変申し訳御座いません。また今一度、ご依頼申し上げます。どうか私の代わりに、穰子の助けとなっ  
てあげて下さい。

——かしこ

親愛なる霧雨魔理沙様へ

秋静葉



そうして二枚目にはたった一言が、無意識の殴り書きのように、こう記されていた。くしゃりと握り潰されたような紙質からは、恐らく一度書き損じとして捨てたものを、誤って同封したものかも知れない。

——穰子に帰って来て欲しい。

私にはそれで十分だった。この素直でない秋神様の本心を、確か

に受け取った気がした。

「全く、これじゃあまるで惚気じゃないか。流石の私も、あんたの妹には嫉妬するぜ」

思わず私は、そう独り言ちた。そうしてこの手紙に対し、私はたった一言「承諾した」と手紙に認めて返信とした。

素直でない彼女がこの手紙を読めば、きっと今と同じように素直でないまま、妹は私に任されたと思うに違い無い。けれど今はそれで良い。互いに素直になるには、少しばかりの時間も必要だろう。私と彼女とでは時間の感覚にも隔たりはあるが、まあ数日といったところか。

妹とやらも十分素直でない、どうやら似た者姉妹のようだから、まず探し出すのに時間は掛かるまい。また茸を摘んで、今度は妹のところにも直接渡してやろう。それなら茸狩りは明後日にして、明日は暇だから手紙を返信する序でに塩羊羹を持って博麗神社にでも遊びに行こうか。

私はのんびりと、そう考えるのだった。夫婦喧嘩は——いや、この場合姉妹喧嘩か。姉妹喧嘩は犬も食わない、などと思いつながら。

そうして私は、読み終えた手紙を同じように束にまとめ、紐で括り直して机の奥に大切に仕舞った。また一杯の緑茶を啜り、暫くの間手紙に差し込まれていた楓の葉をくるくると弄んでから、私は寝直すことにした。

寂しさと終焉の象徴の場合 其乃二（後書き）

《其来  
それから

） 寂しさと終焉の象徴の場合 完》

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5346/>

---

其来(それから)～紅葉の神、および豊穰の神の場合

2010年10月8日21時31分発行